

エジプト学研究第 19 号 2013 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2012 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第 18 次発掘調査－	吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・西本真一	15
第 3 期アメンヘテプ 3 世王墓壁画保存修復プロジェクト概報	吉村作治・西坂朗子・高橋寿光	43
アメンヘテプ 3 世王墓壁画に使用された顔料の化学分析	高橋寿光・西坂朗子・阿部善也・中村彩奈・中井 泉・吉村作治	59
アメンヘテプ 3 世の石棺蓋の保存修復作業概報	吉村作治・苅谷浩子・西坂朗子・高橋寿光	97
第 5 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報	近藤二郎・吉村作治・柏木裕之・河合 望・高橋寿光	107
エジプト国家形成期の集落址調査－ヒエラコンポリス遺跡 HK11C における近年の発掘調査－	馬場匡浩	121
〈論文・研究ノート〉		
ナイル川下流域における石製容器の出現と展開に関する一考察－模倣と技術からみたその系譜－	竹野内恵太	135
〈卒業論文概要〉		
ナイル川下流域における石製容器からみた初期国家形成の様相 －先王朝時代から第 1 王朝時代を対象として－	竹野内恵太	151
古代エジプト・建造物の天井に残されたネクベト画像の考察	大橋陽子	159
〈活動報告〉		
2012 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		167
2012 年 エジプト調査概要		171
〈編集後記〉	近藤二郎	177

The Journal of Egyptian Studies Vol.19, 2013

CONTENTS

PrefaceSakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2012, Project of the Solar BoatHiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Eighteenth SeasonSakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO and Shinichi NISHIMOTO	15
Report on the Conservation Work on the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22)Sakuji YOSHIMURA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	43
Chemical Analysis of the Pigments Used in the Wall Paintings of the Royal Tomb of Amenophis IIIKazumitsu TAKAHASHI, Akiko NISHISAKA, Yoshinari ABE, Ayana NAKAMURA, Izumi NAKAI and Sakuji YOSHIMURA	59
Report of the Conservation of Sarcophagus Lid of Amenophis IIISakuji YOSHIMURA, Hiroko KARIYA, Akiko NISHISAKA, and Kazumitsu TAKAHASHI	97
Preliminary Report on the Fifth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian ExpeditionJiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI	107
Excavating Settlement site in the era of Ancient Egyptian State Formation: Recent Excavations at HK11C, HierakonpolisMasahiro BABA	121
Articles		
Some Remarks on the early development of the Stone Vessels in the Nile ValleyKeita TAKENOUCI	135
Summary of the Recent Undergraduate Theses		151
Activities of the Society, 2012-13		167
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2012		171
Editor's PostscriptJiro KONDO	177

2012 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告

1. 総会

日時：2012 年 4 月 23 日（月）

会場：エジプト考古学ビル 2 階

2. フォーラム、シンポジウム

(1) エジプト・フォーラム 21 『蘇った王墓－アメンヘテプ 3 世王墓修復終了記念－』

日時：2012 年 7 月 1 日（日） 15:00-18:00

会場：早稲田大学国際会議場井深大記念ホール

プログラム：

・開会の挨拶

近藤二郎（早稲田大学教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）

・基調講演 (1) 「早稲田大学エジプト調査とアメンヘテプ 3 世」

吉村作治（早稲田大学名誉教授・工学博士）

・基調講演 (2) 「アメンヘテプ 3 世時代の岩窟墓」

近藤二郎

・基調報告「アメンヘテプ 3 世王墓保存修復プロジェクト報告」

西坂朗子（早稲田大学エジプト学研究所招聘研究員）

・パネル・トーク『蘇った王墓－アメンヘテプ 3 世王墓の修復－』

コーディネーター：吉村作治

パネリスト： 中川 武（早稲田大学教授）

近藤二郎

西本真一（サイバー大学客員教授・工学博士）

菊地敬夫（サイバー大学客員准教授）

河合 望（早稲田大学非常勤講師・Ph.D.）

西坂朗子

懇親会会場：アバコ・ヴィラフェリーチェ



パネルディスカッション風景



今回も多くの方々にご来場頂きました

(2) 太陽の船シンポジウム『クフ王の船 取り上げに向けて』

日時：2013年1月25日（土）18:30-20:30

会場：早稲田大学小野記念講堂

プログラム：

・開会の挨拶

近藤二郎（早稲田大学文学学術院教授・早稲田大学エジプト学研究所所長）

・基調講演「プロジェクトとシンポジウムの経緯」

吉村作治（研究代表者・早稲田大学名誉教授）

・「本日の趣旨」

黒河内宏昌（NPO 法人太陽の船復原研究所教授）

・「木材の分析と保存処理方法」

アイーサ ジダン（エジプト考古省・大エジプト博物館保存修復センター保存修復家）

・「三次元復原に向けて」

池内克史（東京大学情報学環教授）

・「復原像のCG表現」

内山博子（女子美術大学芸術学部教授）

・対談『今後に向けて』

吉村作治

中川 武（早稲田大学理工学術院教授・早稲田大学ユネスコ世界遺産研究所所長）

3. 定期研究会

(1) 第13回

日時：2012年4月23日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「ウセルハト墓（TT.47）第5次調査（2011.12～2012.1）報告」

発表者：近藤二郎（早稲田大学文学学術院教授）

(2) 第14回

日時：2012年6月4日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「古代エジプト建築の寸法計画：オペリスクを中心に」

発表者：西本真一（早稲田大学理工学術院客員准教授）

(3) 第15回

日時：2012年10月15日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「岩窟墓の建築的調査 早大調査隊の現場から」

発表者：柏木裕之（サイバー大学世界遺産学部教授）

(4) 第16回

日時：2012年12月10日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「可搬型分析装置を用いた古代エジプト資料の非破壊オンサイト化学分析研究
～ガラスおよびファイアンスの着色技法を中心に～」

発表者：阿部善也（東京理科大学理学部助教）

4. 定期研究会発表要旨

(1) 「ウセルハト墓 (TT.47) 第5次調査 (2011.12～2012.1) 報告」

近藤二郎

これまで2007年12月から、冬季に5回にわたりテーベ西岸のアル＝コーカ(al-Khokha)地区において、テーベ西岸岩窟墓第47号(TT.47)の発掘調査を実施してきた。TT.47の被葬者は、第18王朝のアメンヘテプ3世治世晩年の高官ウセルハトであり、アメンヘテプ3世からアメンヘテプ4世時代への移行を考える上で極めて重要な岩窟墓である。しかしながら、こうした重要な岩窟墓であるにもかかわらず、20世紀初頭の簡単な調査の後、岩窟墓の正確な平面プランや方位、各部の寸法など不完全な状態のままで残されていた。その後、当該岩窟墓は、厚い堆積砂礫により覆われ、いつしか接近することさえも不可能な状況にあった。

TT.47の正確な情報を取得する目的で新たな発掘調査を計画・実施した。墓の位置は、第1次調査(2007年12月～2008年1月)において確定され、第2次調査(2008年12月～2009年1月)において、入口上部の浮彫装飾の再発見に成功した。この入口上部の浮彫装飾は、TT.47とほぼ同時代のTT.192(ケルエフ墓)と酷似していた。TT.192には、アメンヘテプ4世と彼の母親である王妃ティイが描かれていること、TT.47の装飾中央部には、アメンヘテプ3世の即位名が刻されていることから、TT.47からTT.192への移行が明らかになっている。

また、従来、墓中央軸線は南北であると推定されていたが、実際の発掘により、南北ではな東西を示しており、墓の入口は東に面して正面から朝日を受ける構造を呈していることが確認された。第3次調査(2009年12月～2010年1月)で墓入口両脇柱を含む入口まわりの浮彫装飾全体を明らかにし、第4次調査(2010年12月～2011年1月)において、前室内部を初めて観察することに成功した。しかし、墓の前室内部は、崩落した天井により覆われていることが確認された。

そして、第5次調査(2011年12月～2012年1月)が実施され、TT.47の前室奥壁と奥室内部に関して重要な知見が得られた。本報告では、短期間ながら大きな成果のあった第5次調査の報告と今後の調査計画について報告していく。

(2) 「古代エジプト建築の寸法計画：オベリスクを中心に」

西本真一

17世紀にグリーヴスがピラミッドを実測した後、その報告からアイザック・ニュートンは約52cmというキュービットの単位長を突き止め、以降はこの長さを基準とする平面分析が試みられてきた。同じ長さを有する物差しが後に複数出土しており、今日この単位長の解釈が揺らぐことはない。だがキュービットは45cmほどの長さではなかったのかという別の解釈は、「エジプト誌」のジョマールの論考でうかがわれるように19世紀初頭まで唱えられ、これが小キュービットという幻想を生む遠因となった。古代エジプトの建築研究で問題となるのは立体的な把握の不在であり、寸法計画を探る場合でも単に平面の分析で終わる場合

が多い。従って古代エジプト建築できわめて特徴的な壁体の倒れがどのように定められたかが今でも課題となっている。古王国のピラミッドの形姿よりも、実は僅かな勾配が施される新王国のオベリスクのかたちの追究の方が設計技法の全体の解明に繋がると考えられるのはこのためである。かつてキルヒャーはオベリスクの形態分析に着手した。しかしウィトルウィウスの影響が認められ、信じるのは危険である。一方、20世紀初頭に画期的な見方を披瀝したのはエンゲルバッハであり、注目される。特にセケドの概念の大きな変革と小キュービットに対する認識の破棄を暗示している点は強調されて良い。この観点に沿うならば、第一アナスタシ・パピルスの「オベリスクの問題」も理解が可能であると判断される。

(3) 「岩窟墓の建築的調査 早大調査隊の現場から」

柏木裕之

早稲田大学古代エジプト調査隊は、近年エジプト各地で岩窟墓の調査研究を展開している。筆者は建築班の一員としていくつかの調査現場に参加する機会を得、特に岩窟墓の掘削工程について研究を進めてきた。本研究会では、ダハシュール北遺跡のシャフト墓群、アブ・シール南丘陵遺跡のイシスネフェルト墓、アメンヘテプ3世王墓の2つの部屋を取り上げ、建築的な観点から考察を試みた。ダハシュール北遺跡についてはシャフト墓の掘削工程を検討し、棺を収める空間以外をあらかじめ用意し、被葬者が決まった段階で部屋作る、二段階の工程が踏まれた可能性を提示した。アブ・シール南丘陵遺跡のイシスネフェルト墓では、部屋を掘削する途中の段階に石棺の本体と蓋が搬入されたことを示し、特に蓋石は未完成の状態で搬入され、室内で作業が続けられたことを述べた。アメンヘテプ3世王墓の埋葬室に付属する2室（Jd、Je室）を取り上げ、改変の過程を詳細に検討した。その結果Je室は少なくとも2段階の改変があり、現状のJe室はJd室が完成した後に拡張された可能性を提示した。

(4) 「可搬型分析装置を用いた古代エジプト資料の非破壊オンサイト化学分析研究

～ガラスおよびファイアンスの着色技法を中心に～」

阿部善也

古代エジプトにおいて青色はナイル川や大空を表す神聖な色であり、特にコバルト（Co）を着色剤とする青色ガラスやファイアンスは、希少なラピスラズリの代用品として利用されていた。その原料はエジプト国内で発見されたCoを含むミョウバンであり、このミョウバンが発見された新王国時代第18王朝のエジプトでは青色ガラスやファイアンスが大量生産された。しかしながら第19王朝以降は青色ガラス・ファイアンスの出土例がきわめて少なく、第18王朝から第19王朝への切り替わりに伴い、Co着色剤の利用に何らかの変化が生じたものと考えられてきた。ところが、アブ・シール南丘陵遺跡およびダハシュール北遺跡の発掘調査によって、第19～20王朝に年代付けられる青色ガラス・ファイアンスが大量に発見され、第19王朝以降もエジプトでCo着色剤が利用されていたことが明らかとなった。そこで可搬型の蛍光X線分析装置をこれらの遺跡へと持ち込み、非破壊で化学組成分析を行ったところ、第18王朝に生産されたミョウバンを原料とするガラス・ファイアンスとは明らかに組成的特徴が異なり、ミョウバンに代わる新しいCo原料が第19王朝以降のエジプトで発見されていた可能性が示された。

5. 法人会員

早稲田大学エジプト学会の法人会員として、(株)熊谷組、(株)ポニーキャニオン、(株)アケトにご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

エジプト学研究 第19号

2013年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.19

Published date: 31 March 2013

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University